

## はじめに

「お前っていつも怒ってるな」と、高校時代の親友・野口常夫が言う。

「怒るのは思い上がり。自分が偉いと思い、人を下に見ている証拠だ」とある本で読んだ。

しかし、世の中には不条理なことが多く、理不尽なことが平然とまかり通っている。誰かが指摘しなければ、あるいは指摘してさえ、何も変わらない。

皆と同じでないと不安で、平均的範囲に居ないと不満。私たちはいつの間にかそんな社会を創り上げ、すっかりそれに慣らされてきた。慣れてしまえばそれはそれで、何ら違和感はない。

異論を唱えれば摩擦を生じる。だったら素知らぬ顔をしている方がいい。体裁のいい表現をすれば「空気を読め」ということだろうか。

「今日は喧嘩しないで帰ってきなさいよ」

母は家を出る私に毎朝そう言った。喧嘩といっても口汚くののしり合ったり手を挙げたりしたわけではない。おかしいと感じたら、例え目上の人であってもそれを指摘した。母は、「もう少し賢い生き方を身につけなさい。そのためにもむやみと喧嘩なんかするんじゃない」と私を戒めた。

ある精神科医が、「生まれ持った性格は生涯にわたって変わらないが、考え方は変えられる」と言った。不器用なことに、私は何も変わっていない。

「どんな話をしようと、それはすべて自慢話だ」というのも、別の本で読んだ。

その伝でいけば、「毎日欠かさず散歩をしています」というのでさえ、いかに健康に留意し規則正しい生活を送っているかを、誇示し、自慢しているということになる。

「旅行に行ってきた」「孫がかわいい」なども、自慢げに聞こえる。となると、何も言えない。

しかし、私はこれまで、どれほどたくさんの助言や忠告で救われてきただろう。たまたま新聞で目にした一言にも、助けられた。

だから、恩返しをしなければいけない、誰かの何かの役に立てるなら、そういう思いで本書をしたためた。読みようによっては自慢話と取られかねない内容も少なくないかも知れない。

それはどうか、書き手が未熟故と寛容なお心で読み進めていただきたいと切に願うばかりである。

そこにいることが誰かに必要とされる人でいたい

そこにいることで誰かが喜んでくれるそんな生き方がしたい